

季刊マーメイド

逗子市立図書館報
第22号
2019年7月1日発行
逗子市立図書館
逗子市逗子4-2-10
046(871)5998
<https://www.library.city.zushi.lg.jp>

明治16年のふたつのトンネル

なごえずいどう こつぼずいどう ～名越隧道・小坪隧道～

三方を山々に囲まれた逗子は、明治の初め頃まで鎌倉から逗子に入る3つのルートがありました。ひとつ目は名越切通しを通る「山越えルート」、ふたつ目は材木座村から披露山の七曲りを新宿稻荷社へ下る「海沿いルート」、そしてもうひとつは小坪の海伝いを通る危険な「崖道ルート」です。しかしこの道も険しく、悪天候時や荷物を持つての通行はとても大変でした。そこで、名越切通しの下にトンネルをつくらうと、地元の有志が立ち上がりました。明治16（1883）年に7ヶ月の工事期間を費やし、鎌倉と逗子を結ぶ平坦な道路が開通しました。それが名越隧道と小坪隧道です。トンネルの開通により、三浦半島西岸の交通は飛躍的

に便利になりました。

この隧道をつくるのに尽力したのが逗子の有力者、久木の松岡富道と小坪の高橋安行です。

人物紹介

松岡富道（まつおかとみみち）

：明治前期の県議。久野谷村の地主の家に長男として生まれる。明治10（1877）年久木村戸長となる。隧道開通に尽力後、県議会議員、公郷村ほか4ヶ村の連合戸長に就任した。

高橋安行（たかはしやすゆき）

：小坪村長であった高橋安詮の元に芦名の吉田家から養子に入る。養父・安詮の死後、明治10（1877）年小坪村戸長となる。明治22（1889）年田越村村長に就任。同年敷設された横須賀線に逗子停車場の名を付け、避暑地逗子の名を広めた。

開通までの道のり

トンネルづくり立ち上がった二人は、資金調達から始めました。当時は公共事業といえども、国や県が費用を負担してくれるものではありませんでした。受益者負担という考え方から、有志を募り地域の人々の寄付金でまかなわなければなりませんでした。

そこで明治16（1883）年1月8日、松岡富道と高橋安行はトンネル開削の資金集めのため、三浦半島全てを管轄する村役場や議員など、三浦半島中の村々を連日のように説得して回ります。トンネル開通により、地域が受けるたくさんのお恩恵を積極的にアピールし、ひと月かけて伝えました。そして、努力の甲斐あり、郡長や各地の区

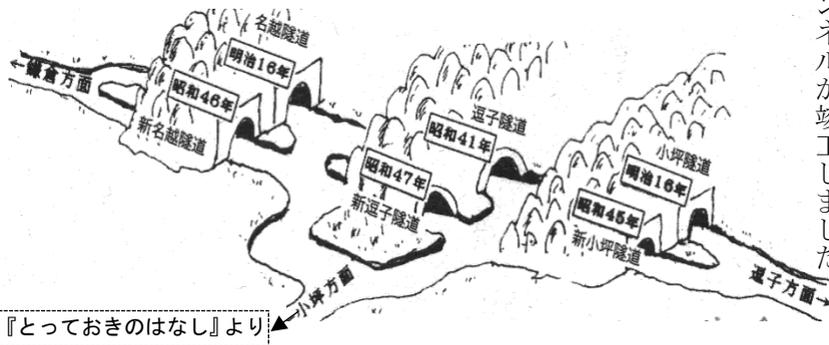
長などの有力者に賛同を得ることができたのです。3月末、「名越新道開削委員会」が発足しました。

4月23日「名越坂新道開削願」（なごえざかしんどうかいさくねがい）を神奈川県令沖守固（おきもりかた）に提出しました。工事の許可が下りると、県土木課員による正式な測量が始まり、4日間連続という早いペースで測量・杭打ちの作業がすすめられました。

委員会の規約により、工事中は三浦郡から2名、鎌倉郡から1名が必ず立ち会うことになっていました。そのため、年末までに高橋安行は82日も立ち会っていたことが当時の工事日記に記されています。

そして年の瀬も迫った同年12

月28日、7ヶ月の工事を経て、ついに名越隧道と小平隧道の2つのトンネルが竣工しました。



『とっておきのはなし』より

期間限定有料道路に？

松岡富道と高橋安行が集めた工事資金の寄付金額は、合計で402円88銭1厘、しかし実際の工事費用は519円74銭6厘でした。

このため、費用を補助金や寄付金だけではまかないきれなくなってしまうという事態が発生しました。

あと少しで隧道が完成するという頃でしたが、松岡富道は自分の田畑440アールを抵当にして、三井銀行から半年の返済期限で1800円を借金することにしました。しかしながら期限内での返済は厳しく、やむを得ず隧道を明治19（1886）年3月から15ヶ月間の期限付きで「名越坂新道道銭」（なごえざかしんどうどうせん）として通行料を

徴収する、有料道路としました。通行料は、人5厘、牛馬1銭、人力車2銭、警察官、郵便配達者・軍人・外国人は無料でした。

珍しいレンガ積み

名越隧道・小坪隧道の入り口にはレンガがあしらわれています。

名越坂の道路が整備され、両トンネルが拡張された昭和4～6（1929～1931）年に入り口のレンガ積みがなされたと推測されています。レンガ壁の積み方には組み合わせにより、イギリス積み、フランス積み、オランダ積みなどがあります。そのなかでも小坪隧道入り口のレンガの積み方は珍しいオランダ式を採用しています。イギリス積みと同様、小口積みと長手積

みを交互に段を違えて積む積み方で、イギリス積みとの違いは角の処理にあります。

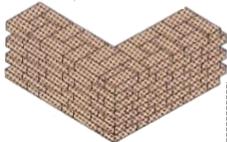
一方、名越隧道入り口のレンガ積みは、大正から昭和にかけてつくられた国道・県道などにみられる一般的な積み方を採用しています。

れんが壁の積み方

イギリス積み（1枚半）



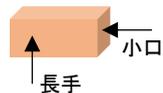
フランス積み（1枚半）



オランダ積み（1枚半）



『日本大百科全書 24』 小学館
1988 R031 = 24より 一部加筆



選奨土木遺産に認定!!

小坪隧道・名越隧道は平成21年度公益社団法人土木学会（JSC E）による選奨土木遺産に認定されました。

認定理由

明治16年地元の有志により掘られて以来、大正年間、の拡幅・煉瓦巻を経て現に至る。優美な意匠の杭門がその歴史の重さを伝える。

選奨土木遺産に認定された隧道をこれからも大切に残していきたいものです。

文学作品にみる 名越隧道・小坪隧道

名越隧道・小坪隧道は小説や随筆にも登場しました。

川端康成『無言』

：鎌倉から逗子へ車でゆくのは、トンネルを抜けるが、あまり気持ちのいい道ではない。トンネルの手前に火葬場があって、近頃は幽霊がでるといふ噂もある。夜なかに火葬場の下を通る車に、若い女の幽霊が乗つてくるといふのだ。：

『川端康成集一片腕一』筑摩書房2006 より抜粋

永井龍男『コチャバンバ行き』

：逗子からは一山越えるので、途中にトンネルがある。
トンネルを抜けると火葬場があつたりして、妙に陰気な道なので昔から怪談めいた話がいっつかある。：

『永井龍男全集 8』講談社1981 より抜粋

文学作品に出てくる名越隧道・

小坪隧道（トンネル）は、幽霊や怪談といったイメージなのでしようか。作家たちにとって創作するうえで格好の材料だったようです。

△主な参考資料▽

『逗子市史 通史編』逗子市 P 213.7 ㍉

『逗子市史 資料編3 近現代』逗子市 P 213.7 ㍉

『三浦半島のトンネル』土方謙次郎著・刊

Z 51.B ㍉

『図説三浦半島―その歴史と文化―下巻』

石渡隆之〔ほか〕執筆 郷土出版社 P 213.7 ㍉

『とっておきのはなし』かながわ国際交流財団編集 神奈川県横須賀三浦地域県政総合センター P 291.3 ㍉

『手帳②』『手帳⑦』手帳の会編・刊

Z 05.Z ㍉-2 Z 05.Z ㍉-7

『道・湊・鉄道とともに歩むかながわの街の歴史』小方武雄著 技報堂出版 P 213.7 ㍉